

薬師寺の隅木蓋瓦

薬師寺(奈良市西ノ京町)から出土した隅木蓋瓦を概観し、隅木復原との関わりにも言及する。

薬師寺の隅木蓋瓦の型式と出土分布 これまでに発掘調査によって出土した隅木蓋瓦は大別6型式が認められる。各型式の特徴と出土分布は次のとおりである。

A型式：分厚い蓋板の下面三方に凸帯を巡らし、木口面に珠文帯ではさんだ花雲文を飾る。南大門地区①出土の完形品。平城宮A型式(「平城宮の隅木蓋瓦」『年報1999-I』)と類似するが、正面にも凸帯を有し、茅負のあたる刳形の角度が広く(約120度)、浅く(4.5cm)、釘孔が1個所である。幅34.1cm、全長39.1cm、高さ7.2cm。本型式は、西僧房地区④⑩、西面回廊地区⑥からも出土。伝薬師寺出土の同範隅木蓋瓦(『奈良国立博物館藏品目録考古篇 仏教考古』1993)は、花雲文が上下逆。

B型式：凸帯中央に水切りを持ち、蓋板中央が山形に復原できる。平城宮B型式と共通する。ただし、刳形縁端上の細い凸帯は無い。西僧房地区⑤出土。現存幅19.4cm、現存長21.8cm、刳形角度約100度。

C型式：蓋板の下面三方に凸帯を巡らす、平城宮D型式に共通する奈良時代以降通有の隅木蓋瓦。凸帯の隅、入隅の角度が直角をなすもの(西僧房地区⑧出土)、隅丸にするもの(西僧房地区⑦出土)、蓋板が山形をなすもの(西塔地区⑪出土)など、細部の特徴には変異がある。

D型式：三方の凸帯外側下半部が段をなす。幅21.9cm。現存長15.0cm、刳形角度約90度。金堂地区②出土。

E型式：正面凸帯が前方に出て段をなし、両側面の凸帯下面を斜めに削る。側面凸帯の外側に釘穴を穿つ(図

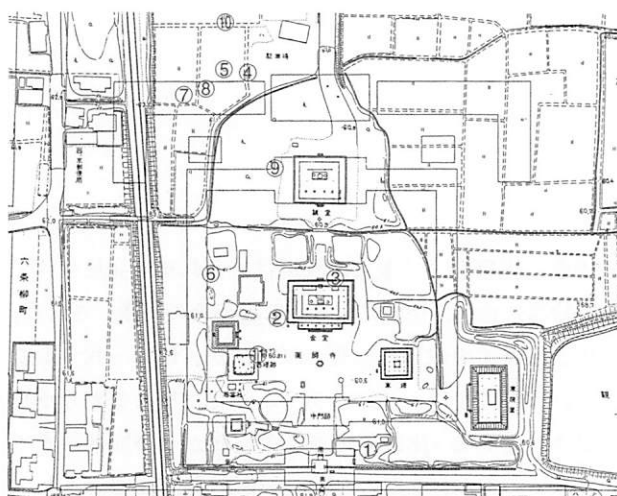


図1 薬師寺隅木蓋瓦の出土分布

2)のは珍しい。全長28.8cm。現存幅14.5cm、高さ3.6cm。講堂地区⑨出土。D型式とともに平安～鎌倉時代頃か。

F型式：正面および側面に連珠文帯を飾る。下面の凸帯は低い。現存幅10.2cm、現存長13.0cm、高さ3.0cm。西面回廊地区⑥出土。軒平瓦文様との共通性から、鎌倉時代頃のものとは推定する。

隅木の復原 隅木蓋瓦は、隅木の復原に有力な資料となる。とくに、凸帯内法(a)と、刳形～正面凸帯内側間の寸法(b)が重要である。aは隅木の幅、bは隅木の茅負からの出の、いずれも上限寸法を示す。薬師寺の隅木蓋瓦では、①a=31.2cm、b=32.3cm、②a=15.5cm、b=8.5cm、⑤a=24.4cm(復原)、b=25.2cm、⑪a=21.0cm(復原)という値が得られる。(千田剛道/平城宮跡発掘調査部)

図2 薬師寺隅木蓋瓦E型式(撮影/中村一郎)

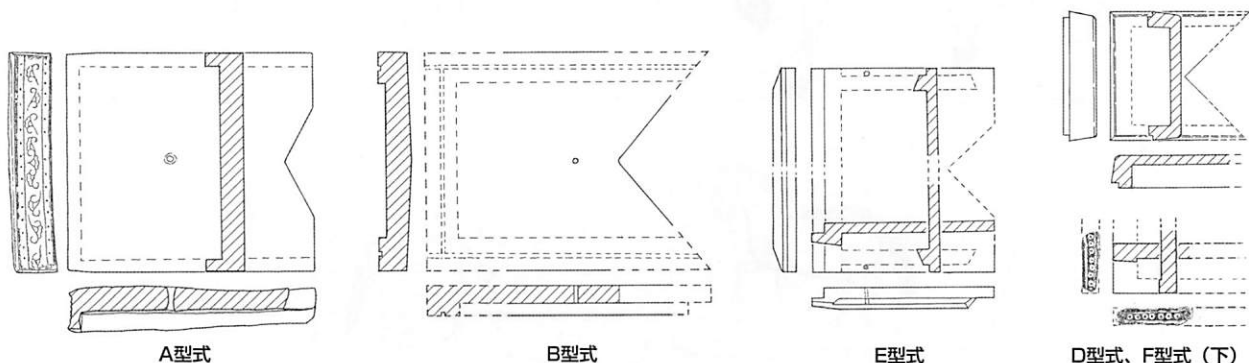


図3 薬師寺の隅木蓋瓦(1:12)